

## Christina Rossetti の *Goblin Market* : 無垢と経験の統合

野 口 忠 男

### はじめに

*Goblin Market* は1859年 Christina Rossetti が29歳の時に書かれ、1862年3月ロンドンの Macmillan 社から *Goblin Market and Other Poems* の題名で出版された。本詩集の巻頭を飾るこの詩には、兄 Dante Gabriel Rossetti の挿絵が添えられ、姉 Maria Francesca Rossetti への献辞が記されている。Ruskin はこの詩の韻律の不規則さを酷評したけれども、多くの批評家や大衆は非常な好意を持ってこの作品を受け入れたのである。<sup>(1)</sup> Dolores Rosenblum も述べているように、*Goblin Market* は C. Rossetti の最も有名な詩であり、“singular narrative power and richness of texture” 「並みはずれた叙述の力と豊かな構成」から成り、彼女の他の透明な作品には見られない“opacity” 「意味の不透明さ」が認められ、文学趣味の変遷により高く評価されてきている。それだけでなく韻律のみごとな斬新さと多様さやラファエロ前派の絵画を思わせるあざやかな色彩の輝き、巧みな比喩的象徴的表現が見られる。

*Goblin Market* の文学史上に於ける位置に関して、Stephen Prickett は、空想的な文学の流れとして捉えている。つまりこの作品は、18世紀のゴシックや Coleridge からの流れをくみながら、Kingsley の *Water-Babies* や George MacDonald の *Lilith* へと至る一連の幻想的文学の一つである。ヴィクトリア朝の人々の怪奇への強い興味は、彼らの二分された心の一面を示すものであり、そのためにこの作品は彼らが最も深いところで必要とした欲望をみごとに表現しているものである。<sup>(2)</sup> 確かに18世紀後半の英国社会は、ピューリタンの思想と功利主義のために、精神の自由な発達が阻止されていた。ロマン派の詩人たちは、これに反旗をひるがえし、子供の空想や想像力を重視し、妖精の住む世界へ関心を向

けるようになった。ヴィクトリア朝の詩人たちも、社会の進歩発展を支えた合理主義的精神に懐疑の念を抱き、想像力の発動の場である妖精の世界へ目を注いだのである。詩人として C. Rossetti も懐疑と不安の渦巻くヴィクトリア朝時代を敏感に捉え美の源泉を求めて、豊かな想像世界へ足を踏み入れたのである。私達も Pricket と同様に *Goblin Market* をこの大きな潮流の中に位置づけて理解するよう努めることが肝心である。

この作品の読みに関して、すでにいろいろな視点から論究されている。Christina の次兄 William によって報告されているように、C. Rossetti は、“she did not mean anything profound by this fairy tale” 「このお伽話に何も深い意味を持たせようと意図したわけではない<sup>(4)</sup>」と主張していた。しかし William は、“Still the incidents are rich as to be at any rate suggestive, and different minds may be likely to read different messages into them” 「それでもなおこの詩の出来事はとにかく暗示に富んでいるものであり、異なる心で読めば別の意味に取れるかも知れない<sup>(5)</sup>」と多様な読みの可能性を示唆している。読みの多様性に関して C. Rossetti の最初の現代伝記作家 Lona Mosk Packer は、読みの三段階を示している。

In common with other such enduring works of art as *The Faerie Queene*, *Gulliver's Travels*, and *Alice in Wonderland*, *Goblin Market* has many levels of meaning. At the narrative level it offers a charming and delicate fairy tale to delight a child, if a somewhat precocious one. At the symbolic and allegorical level, it conveys certain Christian ethical assumption. At the psychological level, it suggests emotional experience universally valid.

『小鬼の市』は『妖精女王』、『ガリバー旅行記』、『不思議の国のアリス』のような不巧の作品と同様に、様々な意味の段階がある。物語の段階として、この作品は幾分ませた子供だとしても、その子供を喜ばせる魅力的で巧妙なお伽噺である。象徴的で寓意的な段階としては、キリスト教のある倫理を前提としている。心理的な段階では広く認められる感情経験を現わす。<sup>(6)</sup>

確かにこの作品は、子供のためのお伽噺、キリスト教倫理それに心理的な感情経験の観点から読むことが可能である。Packer 自身は、キリスト教に於ける墮罪の問題として理解し、その伝記的事実を C. Rossetti の片想いの相手 William Bell Scott に求めている。お伽噺の視点を重視しながら A. A. De Vitas<sup>(7)</sup> は考察を進め、キリスト教倫理の観点からは Marian Shalkhauser<sup>(8)</sup> が論究している。深層心理の立場から Winston Weathers<sup>(9)</sup> が分析を行い、Freud の id-ego-superego と Nietzsche の Apollonian と Dionysian の考え方をを用いて姉妹の自我の発展と調和の経過を見ごとに論じている。さらに Dorothy Mermin<sup>(10)</sup> は論を発展させて、大人への成長と女性の自立の問題として捕えている。

……the form, like the content, seems to betray an assumption that women can only be grown-up, independent, productive, and active in a life without men.

この詩の内容と同様に、この形式には女性は男性のいない生活の中で成長し、独立し、創造し、活動するというある種の想定がなされているように思える。<sup>(11)</sup>

Mermin のこの独創的な考えを踏まえた上で、私達は *Goblin Market* を Erich Neumann の研究を基にして、女性の心理の発達過程を辿り、さらに女性なるものと男性原理、女性なるものと創造性の関係を考察していきたい。その際女性に於ける男性原理を否定的に捕えるのではなく、豊かな詩作品の創造を支える力の働く世界として理解したいのである。

## 1 無垢なる同一性

二人の姉妹 Laura と Lizzie の関係を暗示していると思われる表現を引用してみる。

Golden head by golden head,

Like two pigeons in one nest  
 Folded in each other's wings,  
 They lay down in their curtained bed: (11.184-7)

金髪の姉妹は、柔和な鳩のように羽を重ねて一つのベットに寝ている。Packer も指摘しているように、彼女たちは互いに分離した存在ではなく、自然な一体化をなす純粹無垢な存在であることが認められる。<sup>(12)</sup> A. A. DeVitis は、二人の名前の意味について触れている。Laura の名前は、詩人の榮譽を示す月桂樹を表わすだけでなく、Petrarch の思慕の女性 Laura を指している。Lizzie の名前は、Elizabeth の愛称であり、義務と責任の人生と魂の叫びを示している。<sup>(13)</sup> Laura と Lizzie は、二つの異なる顔を持つ一人格から成っていることは明白である。Erich Neumann は、この姉妹の同一性を「女性の自我が、母性的な無意識や母性的な自己と<sup>(14)</sup>いまだ結ばれている自己保存の段階」と捉えている。事実二人は、母性的な働きをなすと考えられる家やベットに守られ保護されている。彼女たちがこの心地良い閉ざされた世界に安住している限り、生命は安全に保護される。しかし彼女たちの健全な意識の発達は、母性的な無意識の拘束によって阻止されることになる。この母性的な自己保存の段階を乗り越え、人格の発達をうながすためには、開かれた異界に住む怪奇な goblin との出会いが必要なのである。

ここで私達は論を進めるに当たり、作品に見られる goblin の特徴と役割について見ておきたい。goblin の一般的な特徴として、Kathaline Briggs は *A Dictionary of Fairies* の中で“A general name for evil and malicious spirits, usually small and grotesque in appearance” 「一般に身体は小さく容姿は醜い、たちの悪い精霊である」<sup>(15)</sup>と述べている。C. Rossetti は、goblin たちの姿を次の様に描写している。

One had a cat's face,  
 One whisked a tail,  
 One tramped at a rat's pace,  
 One crawled like a snail,  
 One like a wombat prowled obtuse and furry,

One like a ratel tumbled hurry skurry.  
 She heard a voice like voice of doves  
 Cooing all together. (11.71—8)

goblin たちは(1)日の沈む夕暮時に小川のへりのいぐさの中に複数で出現する。(2)あらゆる季節にいろいろな所で産するめずらしく甘美な果物を商っている。(3)彼らの格好は、背は小人のように小さく人間の姿をし、顔は猫、ねずみ、蝸牛、ウォンバットなどである。(4)声は鳩のような奇妙な鳴声である。(5)性格は優しさと狂暴さの二面を備えた男性の商人のイメージで描かれている。商人のイメージを列挙してみると次のような多様な表現に気づくことが出来る。goblin men (1.49), little men (1.55), merchant man (1.70), the goblin men (1.88), the whisk-tailed merchant (1.107), Pretty Goblin (1.113), Good folk (1.116), fruit-merchant men (1.241), the evil people (1.437), goblin merchant men (1.474), The wicked, quaint fruit-merchant men (1.553)。以上のように私達はゴブリンの顕著な特徴を5点認めることができる。このgoblinの世界は、Laura や Lizzie の住む現実の世界とは異なり、川と草の茂る甘美な幻想の楽園と言ってよい場所である。その空想の世界には、不思議な妖精が生息し、美と官能の横溢が見られる生命的な詩的空間と想定されるところである。ラファエロ前派の洗礼をうけた G. M. Hopkins の“A Vision of the Mermaids” (1862年) に描かれた人魚たちの鮮烈なイメージを思い起こすことが出来る。Hopkins にとって人魚たちは、光を希求する神聖への欲求と官能とエロス性の顕示であった<sup>(16)</sup>。しかし C. Rossetti の描く goblin たちは、神聖への欲求は見られずあくまで優しい仮面で覆われた動物的な狂暴さを有する男の商人である。しかし彼らが売る甘美な果物は、魔力的な魅力を備え、Laura と Lizzie の心を強く誘惑してやまない官能性とエロス性は具備している。さらに goblin の果物には Packer が指摘するように“the seduction of imaginative emotion”「想像的な感情を魅惑するもの<sup>(17)</sup>」が見られるのである。P. B. Shelley が西風の“Wild Spirit”の中に“Destroyer”と“preserver”の働きを感知したように、果実には官能的な破壊の要素と美的な想像的要素が秘められている。人間の根源的の欲望を満してくれる甘味な果物の創造的

な働きについては後で再び論じることになる。

Erich Neumann は、goblin 出現のこの段階を「父権的なウロボロスの侵入」と捉えて次の様に説明する。

父権的ウロボロスの侵入は、女性的なものが征服される陶酔の体験，“有無を言わせぬ侵入者”に襲われ把握される感動の体験と軌を一にしている。この侵入者は、個人としての具体的な男性に関係づけられたりするのではなく、無名の超人格なヌーメンとして経験される。非人格性と征服とがこの段階の体験の構成要素にほかならない。<sup>(18)</sup>

Laura や Lizzie が目にする goblin たちは、男性の姿をした無名の神性と考えて差しつかえない。ユングが述べているように彼らが一個の人物ではなく、複数として現われるのは、<sup>(19)</sup>聖性なるものとしてはまだ無名であり、ある決った形をしていない存在であるためである。この父権的なウロボロスの侵入は、ユングに於けるアニムス、つまり女性に於ける男性的なるものの出現と解せられる。それでは Laura が goblin で代表される父権的なウロボロスつまりアニムスに征服されていく過程を詩に基づいて考察したい。

## 2 無垢の喪失

Laura と Lizzie の goblin に対する態度には、大きな相違が見られる。Laura は積極的に goblin に向かい、Lizzie は意識的に回避している。姉の Lizzie は、妹に対して goblin の姿を見ることも、彼らの果物を買うことも固く拒否するように主張する。

“We must not look at goblin men,  
We must not buy their fruits:  
Who knows upon what soil they fed  
Their hungry thirsty root?” (11.42-5)

You should not peep at goblin men. (1.49)

goblinの姿を見ることは、彼らに深い関心を示し、彼らの誘惑を受け入れてしまうことになりかねない。まして彼らの果物を食べることは、樂園に於いて Eve が神の姿が見えない間に、蛇の誘惑によって禁断の木の実を食べた罪に関連して来る。Lizzie は果物は決して樂園で栽培された神の賜ではなく、悪魔の有毒な果実であることを知っている。つまり彼女は神と悪魔を識別出来る倫理的で宗教的な存在として描かれている。

Their offers should not charm us,  
Their evil gifts would harm us. (11.65-6)

Lizzie も goblin の魅惑的な誘惑に心動かされるけれども、自からの固い意志でもって逃れ妹を川辺に残して家路に急いで帰る。好奇心の強い Laura は、制する者もない今 goblin の甘い誘惑にはまる。彼女の空腹を思わせる激しい渴望が、動植物や進水時の船の比喻を用いて巧妙に描写されている。

Laura stretched her gleaming neck  
Like a rush-imbedded swan,  
Like a lily from the beck,  
Like a moonlit poplar branch,  
Like a vessel at the launch  
When its last restraint is gone. (11.81-6)

C. Rossetti は“swan” “lily” “poplar branch”の比喻を用いて、純粹無垢な Laura が、goblin の誘惑に揺れる姿を描き、船が初めて進水するイメージは、彼女が最後の拘束を離れて荒れ狂う海に乗り出そうとする様子を捉えている。

Laura と goblin との取り引きに於いて興味深いことは、お金がないと果物が買えないことである。彼女はまったくお金がないため、自分の金髪の巻き毛と交換に果物を手に入れることになる。髪は Laura の生命を象徴するほど大切なものであり、髪と果物を交換する行為の意味は、彼

女の無垢な処女性を喪失することを暗示している。彼女はこの時点を契機に無垢なる存在から経験へと足を踏み入れたことになる。Laura は goblin の果物をむさぼるように吸い続けることによって、貪欲な本能的欲望を満足させることに成功する。彼女の暗い goblin の世界での自己開放には、ヴィクトリア朝の詩人たち——Tennyson, Arnold それに Hopkins——を捕えた無菌の自意識が認められる。goblin の住む暗い世界は、Freud の精神分析による id に相当し、goblin たちは無意識中に潜む本能的なエネルギーの源泉として働いている。彼らは激しい行動として機能するために、無菌の自意識は翻弄され、打ちくだかれ自我の深い苦悩を体験することになる。

Laura は姉の厳しい戒めにもかかわらず、goblin の果物を思う存分食べてしまった。家路に帰った彼女は、Jeanie の悲惨な死の話を聞かされる。Jeanie は月の明るい晩に goblin と出会い、彼らの果物を食べたため激しい渴望に悩まされ、goblin を恋い焦がれながらやせこけ青ざめて死んでしまった。彼女の眠るところは、今でも草も生えず花も咲かない不毛な地である。この“daisy”は無垢を示すものであり、開花しない“daisy”は、無垢の喪失を意味している<sup>(20)</sup>と言える。goblin の果物を一度食べてしまった以上、Laura は Jeanie の運命を背負わなければならない。さらに Laura と Lizzie の自然な合一は失われ、二人は引き裂れた存在になるしかないのである。

朝になり Laura の身心に果物の毒気症状が現われ、Lizzie の快活さに比べて彼女は現実感覚を失い不安に悩まされる。

Laura in an absent dream

One content, one sick in part; (ll.211-2)

彼女は夜の goblin を思い焦がれ、彼らの叫び声を聞きに小川へ出かける。しかし姉には goblin の叫び声が聞えても、Laura にはまったく聞えないのである。C. Rossetti は、妖精の国の論理に従って話を展開していることが理解される。Laura の生命は、根元からしおれ始め、家に引き籠り望みは挫け夜は眠れず、この悲惨な状態を月や炎が欠け弱まるイメージを用いて描き出している。



ここに至って Laura は、以前拾って来た一粒の種“kernel-stone”のことを思い出した。これは goblin との交換によって獲得されたものであり、彼女の体中で芽ばえ成長する新しい生命の象徴であったろう。種を大地に植えることは、彼女の苦悩からの復活と深く関係がある。種は南に面した壁ぎわに植えられたけれども、芽ぶかず枯れてしまった。これは Laura の迫り来る死を暗示しているとともに新しい創造物の不毛性まで語っているように思われる。彼女は働くことも食べることもなく、ただ暖炉の隅にぼんやり坐り、死に直面しているのである。

She no more swept the house,  
Tended the fowls or cows,  
Fetched honey, kneaded cakes of wheat,  
Brought water from the brook :  
But sat down listless in the chimney-nook  
And would not eat. (11.293-8)

Laura の様態は悪化を続け、ついに死出の扉をたたきつづけて来たまま死んでしまった。

Till Laura dwindling  
Seemed knocking at Death's door : (11.320-1)

これは純粹無垢な Laura が、強烈な goblin 体験をした後にたどらなければならない過程である。Laura は goblin つまり本能的な生命源の id 体験を越えて苦悩する自我をより正常な働きにするためにはどうすればよいのであろうか。Erich Neumann によれば、女性的なもの (Laura) を父権的なウロボロス (goblin) の威力から解放するためには、男性的な英雄の出現が必要となる。次に私達は英雄的な勇気を持つ Lizzie の果たす役割について考えてみたい。

### 3 英雄的な無垢

優しく意志の強い Lizzie は、死に瀕する Laura を見捨てることは出来ない。彼女はペニー銀貨を財布に入れて、黄昏時に小川にたたずむと、生まれて初めて耳を澄まし goblin たちをじっと見つめる。彼らは Laura を誘惑したのと同じ手管を用いるけれども、Lizzie は決して屈することなく彼らの誘惑に絶えている。

White and golden Lizzie stood,  
Like a lily in a flood, —  
Like a rock of blue-veined stone  
Lashed by tides obstreperously, — (11.408-11)

Lizzie の goblin たちと不屈に戦う様子には、英雄的な勇気が感じられる。彼らは彼女の強靱な精神に敗れ去り、地下や小川の中へ消え散じて行った。Lizzie は彼らとの死闘によって神性なる力を獲得することが出来たと言える。彼女の無垢について、Brownley は“an innocence backed by courage, loyalty, intelligence, and firmness”「勇気、貞節、知性と堅固に支えられた無垢<sup>(22)</sup>」と述べている。Lizzie は、犠牲的な愛の行為により Laura を救済しようと願っている。

She clung about her sister,  
Kissed and kissed and kissed her :  
Tears once again  
Refreshed her shrunken eyes, (11.485-8)

Laura は Lizzie の果物の汁で毒された血が浄化されていく。ついに Laura は姉の献身的な無償の愛に助けられ、瀕死の危機的状態から生き帰ることが出来た。Laura は無垢と経験を Lizzie の愛を通して統合することが許されたのである。Brownley はこの統合の姿を、“she has arrived at a new kind of innocence”「彼女は新たな無垢<sup>(23)</sup>へと達した」と語っている。私達は Lizzie の英雄的な行為に、暗い goblin の世界に對

時する詩人 C. Rossetti の倫理的宗教的態度を見る事が出来ないであろうか。Laura の芸術的な美的態度と Lizzie の倫理的態度の拮抗と統合に詩人 C. Rossetti の詩創造の原理が働いているように思われる。

Laura の絶望と苦悩の長い日々は終りを迎え、新しい無垢への復活を春の朝の新鮮なイメージを駆使して表現している。彼女の瞳に光が輝き、“Life out death” 「死から抜け出た命」(1.524) を得ることが出来た。

Laura awake as from a dream,  
Laughed in the innocent old way,  
Hugged Lizzie but not twice or thrice ;  
Her gleaming locks showed not one thread of grey,  
Her breath was sweet as May  
And light danced in her eyes. (11.537-42)

完全な自己として生まれ変わった Laura と Lizzie は結婚することになる。この結婚は、自我の分離を通して無垢と経験が統合された象徴的表現である。二人は妻となり、それぞれ子供をもうけ、毎日の養育に明け暮れる。Laura は子供に娘時代の goblin 体験を話して聞かせる。

“For there is no friend like a sister  
In calm or stormy weather ;  
To cheer one on the tedious way,  
To fetch one if one goes astray,  
To lift one if one totters down,  
To strengthen whilst one stands.” (11.562-7)

これは Laura が goblin の出没する暗い世界をのぞき、死に瀕する苦しい体験を通して獲得した知恵である。姉妹の力を得ることによって、いかなる困難も克服出来ることが明記されている。人間の成長の過程に於いて生起する自我と超自我の相互補助的な働きでもある。このより高い段階で統合された女性の知恵は、次の Erich Neumann の言葉に巧みに要約されている。

女性の知恵は思弁的ではなく、もっと生命や自然に近く、運命と生きた現実<sup>(24)</sup>に密着している。その幻想のない現実への眼差しは、理想を抱く男性的な知性を驚かせるかもしれないが、しかし女性の知恵はそれだけではなく、この現実を養い助けつつ、慰め愛しつつそこに結ばれており、さらに死を越えて常に新たな転生と誕生に導くのである。

Neumann は、現実<sup>(24)</sup>に深く根ざした女性の知恵と大地的創造性を重視している。女性の持つ大地的創造性を考える時、Laura で代表される美的な態度と Lizzie で代表される倫理的宗教的な態度の発展的統合、さらにその背後にひそむ goblin アニムスで表わされる無意識の想像的世界を無視することは出来ない。goblin アニムスは、女性の自我の生長を促し支えるだけでなく、創造の源泉としても働いているのである。ユングは、「アニムスはまた、生産的で創造的な存在でもある<sup>(25)</sup>」と女性の内なる男性的なるものの意義を見出している。確かに女性の大地的創造を支える goblin アニムスの闇の世界は、単なる悪ではなく美と力の満ちあふれている詩的想像の根源でもある。C. Rossetti は Laura と Lizzie の goblin 体験を通して、goblin アニムスにかかわる方法を知恵として学んだと思われる。

## おわりに

ロマン派の詩人たちが探求してきた詩の世界は、Laura に見られる闇の goblin 体験と同様の自我の覚醒であったと考えられる。J. Keats の“La Belle Dame Sans Merci”に見られるさまよえる騎士や P. B. Shelley の *Alastor*<sup>(26)</sup> に於ける主人公の死が物語っているように、彼らの最後は深い闇の発見と病魔に取りつかれての死である。それに対してヴィクトリア朝の詩の特徴の一つは、情念と想像の世界への関与と洞察を示しながら、そこで得た美的法悦体験を直視し、美と愛を統一しようと努める詩精神にある。R. Browning の宗教詩“Saul”は、悪霊に取り憑かれた Saul 王が、暗闇の世界で苦悩し精神の危機に直面している。そこへ David が現われ献身的な無償の愛を施すことによって、Saul 王の命が甦

えることを歌った詩である。<sup>(27)</sup> A. L. Tennyson は哀歌 *In Memoriam* に於いて、友人 Hallam の死を深く見つめることによって、神の愛と力を直観し魂をいやすことが出来た。このことは *Goblin Market* に関しても当てはまるヴィクトリア朝詩人たちの reality 認識と言えるものである。この作品に描かれている自我の覚醒と統合の原理は、W. Blake の無垢と経験の歌に於いて呈示されて<sup>(28)</sup>いる。Nietzsche がギリシア悲劇を Apollonian に対する Dionysian の勝利と捕えたのとは異なり、ヴィクトリア朝の詩人たちは、闇を洞察しながらも Apollonian 的な光明と理知へ荷担する傾向が顕著に認められる。C. Rossetti の美的法悦からの覚醒と新しい無垢への発展の主題は、*Prince's Progress* (1866年) や *Maude* (1897年) にも現われる。彼女は神の愛と生命を強く求めながらも、官能性と美の源泉である想像的世界に魅せられていた。詩人は、無限の奥行きと多様性をみせる人間精神を鋭く直視し、無垢と経験の統一への苦悩をこの作品に於いて呈示しているのである。

[注]

- (1) *The Family Letters of Christina Georgina Rossetti* Edited by William Michael Rossetti, Haskell House Publishers Ltd., 1968, pp. 27-8.
- (2) Dolores Rosenblum, *Christina Rossetti The Poetry of Endurance*, Southern Illinois University Press, 1986, p. 63.
- (3) Stephen Prickett, *Victorian Fantasy*, Indiana University Press, 1979, p. 72.
- (4) *The Poetical Works of Christina Rossetti*, ed. William Michael Rossetti, London Macmillan And Co., Limited, 1906, p. 459.
- (5) Ibid. p. 459.
- (6) Lona Mosk Packer, *Christina Rossetti*, University of California Press, 1963, pp. 140-1.
- (7) A. A. DeVitis, "Goblin Market: Fairy Tale and Reality", *Journal of Popular Culture*, 1 (Spring 1968), pp. 418-26.
- (8) Marian Shalkhauser, "The Feminine Christ", *Victorian Newsletter*, 10 (1956), pp. 19-20.
- (9) Winston Weathers, "Christina Rossetti: The Sisterhood of

- Self”, *Victorian Poetry*, 3 (Spring 1965), pp. 81-9.
- (10) Dorothy Mermin “Heroic Sisterhood in *Goblin Market*”, *Victorian Poetry*, 21, No2 (Summer 1983), pp. 107-18.
- (11) Ibid. p. 118.
- (12) Lona Mosk Packer, *Christina Rossetti*, “they seem but different aspects of the same maiden,” p. 141.
- (13) A. A. DeVitis, “Goblin Market: Fairy Tale and Reality”, p. 425.
- (14) エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男訳, 紀伊國屋書店, 1980年, p. 20.
- (15) Katharine Briggs, *A Dictionary of Fairies*, Penguin Books Ltd., Allen Lane, 1976, p. 194.
- (16) *Hopkins Research* 『ポプキッズ研究』第20号, 1991年, 拙文「人魚の幻影」—イメージの語るもの, pp. 24-31.
- (17) Lona Mosk Packer, *Christina Rossetti*, p. 145.
- (18) エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』, p. 27.
- (19) C. G.ユング『自我と無意識』, 思索社, 1991年, p. 135.
- (20) Martine Watson Brownley, “Love and Sensuality in Christina Rossetti’s *Goblin Market*,” *Essays in Literature*, 6 (1979), p. 179.
- (21) Katharine Briggs, *A Dictionary of Fairies* p. 193.
- (22) Martine Watson Brownley, p. 182.
- (23) Ibid. p. 184.
- (24) エーリッヒ・ノイマン『女性の深層』, p. 124.
- (25) C. G.ユング『自我と無意識』, p. 138.
- (26) 「北星論集」18号, 1980年, 拙文「R. Browning の *Pauline*: Identity の確立をめざして—Eros における死と生」 pp. 55-73.
- (27) 「北星論集」25号, 1987年, 拙文「R. Browning の宗教詩: *Saul* に於ける闇と光」 pp. 137-153.
- (28) *Blake The Complete Poems* ed. W. H. Stevenson Text by David V. Erdman, Longman, 1971, p. 105.
- “Without contraries is no progression. Attraction and repulsion, reason and energy, love and hate, are necessary to human existence.”

## C. Rossetti's *Goblin Market* : On the Union of Innocence and Experience

Tadao NOGUCHI

*Goblin Market* is known as the best work by C. Rossetti and there are many ways to read and look at the poem, from folkloric, biblical or a psychological point of view. Recent readings have shown other dimensions to the poem: that it is about the development of the female psyche and autonomy in a female world.

The paper attempts to discuss the union of innocence and experience based on the psychological studies on female mind and behavior by E. Neumann. We can consider the process of self-realization through the experience of the main character, Laura, which is realized by her sister's heroic deed. She has been reborn and she can be aware of life in the world of practical reality. We can point out that C. Rossetti indicates two aspects of woman — the aesthetic sense of Laura and ethical one of Lizzie. We also try to examine the unconscious world of the goblins as the essential imaginative function to produce this creative work. The poetess is considered to have depended much on the rich and unconscious world.